	学部長	学　長
閲覧		

国外派遣研究員報告書

令和　2年　12月　10.日

國學院大學学長　殿

所属・職名　経済学部教授

氏　名　杉山　里枝　㊞

令和　元　年度　国外派遣研究員として実施しました研究について、下記のとおり報告いたします。

記

1　派遣期間　（期間延長のある場合は含めて下さい）

令和　元年　9月　1日　から　令和　2年　8月　31日　まで

実際の出国日　元年　8月27日　同帰国日　2年　8月　28日

2　受入先研究機関など

ハーバード大学ライシャワー日本研究所

3　研究目的

グローバルヒストリーとともに、岩崎彌太郎や渋沢栄一に関する研究も行うハーバードビジネススクール(ライシャワー日本研究所兼任)ジェフリージョーンズ教授のもとで、三菱財閥に関する研究を比較経営史の視点から深めるとともに、国際比較経営史などの知識を得、広い視野からいままで進めてきた日本経済史・経営史研究を深めること。

4 派遣中の研究概要

派遣中においては、当初の計画であった三菱財閥に関する研究だけでなく、ハーバードビジネススクールのベーカー図書館に所蔵されているアメリカ繊維産業に関する一次史料の収集に着手し、実際に研究も開始した。

資料収集は、新型コロナの影響で途中で中止せざるを得なくなったが、それまでに収集した資料や、その他の文献資料をもとに、現在研究をすすめている。本年10月には政治経済学・経済史学会において‘The female workforce in the textile industry of New England in the 19th century　A comparison with Japanese female workforce’　の報告を行い、それをもとに日本語、英語における研究論文の作成をすすめている。

また、グローバル経営史に関する理解も深めた。ハーバードビジネススクールにおいて開催されるセミナーへの参加や教員たちとの議論を通じ得られた広い視野は、今後研究をすすめるうえで非常に大きな財産となった。この点については、12月に開催された経営史学会で、‘「多国籍化」と「グローバル化」近現代日本企業の経験’というタイトルで報告を行い、こちらについても日本語、英語双方での論文化をすすめている。

三菱財閥に関する研究も進んだ。途中、資料閲覧の制限(新型コロナの影響)があり、当初目標としていた単著の完成までは至らなかったが、帰国後に改めて閲覧、収集した資料をもとに現在、完成にむけて作業をすすめている。

そのほかにも、ジョーンズ教授が専門の一つとする「渋沢栄一」に関する研究も、議論を通じて一層進めることができた。英語により論文を公表する重要性を認識し、今までに公表した研究を基に、議論を重ねてブラッシュアップし、渋沢栄一に関する英語論文の作成を行った。これは、来年(令和 3 年)1 月に『渋沢研究』において‘Shibusawa Eiichi's Strategies towards Local Business and Social Welfare’というタイトルで掲載が予定されている。このように、英語での論文、書籍等の作成にも今後、意欲的に挑戦をしていきたいと考えている。

また、ビジネススクールにおいて開かれるセミナー、授業への参加も大きな刺激となった。積極的に自分の考えを発信していくことの重要性も学んだ。　このように、本研究期間は私にとって、今後の研究にもよい影響をおよぼすことになり、大きく役立つものであった。

5 その他の活動

ハーバード大学の学部授業、Program on U.S.-Japan Relations でのセミナーへの参加なども行った。

6 今後の研究計画

三菱に関する研究書をまとめ切ることができなかったため、現在、継続してその作業にとりくんでいる。その他、新たに着手したグローバル経営史およびアメリカ繊維産業に関する研究に関し、2つの学会報告を経て、現在その論文化に取り組んでいる。今後は、日本語論文だけでなく英語論文の作成も同時に行うことを目標にして研究に取り組んでいく。

7 感想・所感

3月中旬から、新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大のなかで、図書館その他の機関があいついで閉鎖されるという事態が生じ、大変な経験をした。図書館に所蔵される一次史料の収集、資料館での研究調査を中断せざるを得なくなり、これは研究上において支障をきたすことになった。しかしながら、オンラインでの文献検索、文献利用が容易にできる状況にあったため、むしろ新聞資料や文献資料などについて、在宅で多く収集することができ、また雑誌資料、論文などにも大量に接することができた。一次史料の収集が容易であれば、おそらくそちらに集中してしまっていたであろうから、知識を拡げるという意味ではむしろ有益であったと感じられる。また、サポートのジェフリージョーンズ教授も、オンラインで熱心に研究の議論をしてくださった。さらに、研究会がオンラインで開かれるようになったため、在米中はもちろんのこと、帰国後においても参加することができ、よい勉強の機会となっている。このように、不便があった一方でオンラインによる恩恵も受けることができた。総じて、有益な時間を得ることができた。